

研究 報告

岐阜県の夏秋トマト産地における 褐色輪紋病の現状について

岐阜県農政部農業経営課岐阜駐在 **わた 渡** **なべ 辺** **ひろ 博** **ゆき 幸**
 岐阜県農業技術センター **こ 小** **じま 島** **かず 一** **き 輝***
 岐阜県農政部農業経営課飛騨駐在 **わた 渡** **なべ 辺** **しん 新** **いち 一****

はじめに

岐阜県において、トマトは飛騨牛、ほうれんそうなどにならぶ主要な農産物品目の一つであり、西濃地域を中心とした低標高地帯（海拔0メートル付近）では施設型の冬春栽培が、飛騨、中濃、東濃地域の中～高標高地帯（標高300～800 m）では雨よけハウスによる夏秋栽培が行われ、ほぼ年間を通じた供給体制が整えられている（図-1）。

そのような中、県内の各夏秋トマト産地では、ここ数

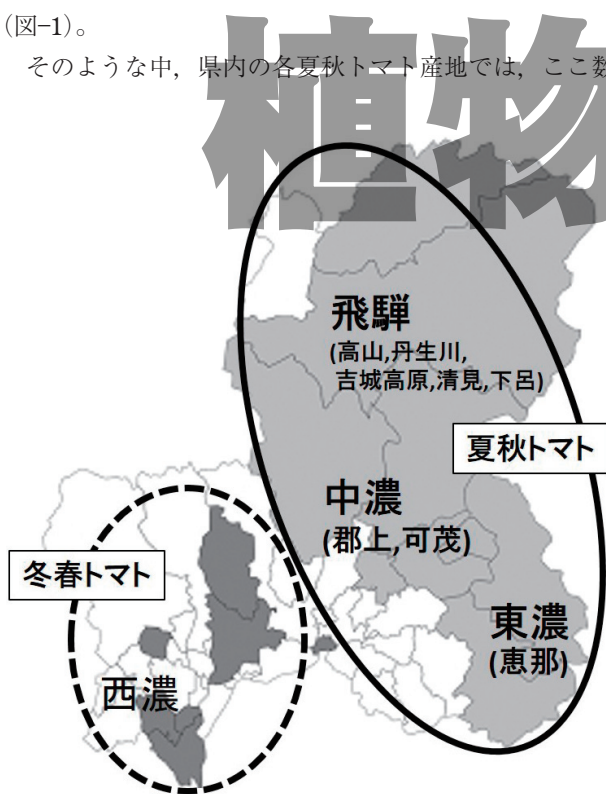


図-1 岐阜県のトマト産地

Current Status of the Occurrence of *Corynespora* Target Spot on Tomato Caused by *Corynespora cassicola* in Gifu Prefecture, Japan.
 By Hiroyuki WATANABE, Kazuki KOJIMA and Shinichi WATANABE

(キーワード: *Corynespora* target spot, *Corynespora cassicola*)

*現所属: 飛騨農林事務所農業普及課

**現所属: 岐阜農林事務所農業普及課

年でトマト褐色輪紋病（病原菌：*Corynespora cassicola*）の多発生による被害が目立つようになった。本病は主に葉に発生し、茎、果実、がくにも発生する（粕山・谷名，2007）。葉では始め小さな褐色斑点が現れ（図-2）、後に拡大してハローを伴った直径5～10 mmの輪紋症状を呈する（図-3）。病勢の進展は早く、多発すると下位葉から急激に枯れ上がる（図-4）。本県の夏秋トマト産地においては、20年以上前から本病の発生が確認され、葉かび病抵抗性品種への切り替えが進み、葉かび病を対象とした防除回数が減少した10年ほど前から徐々に発生が増加した。さらにここ数年で発生面積、発生量は増加し、ひどい場合は収穫最盛期の8月下旬に枯れ上がってしまうケースも散見されるようになった。そこで本稿では、本病の防除対策を確立するために、現地の農林事務所普及指導員と試験研究担当者、革新支援専門員が協力して取り組んでいる活動について紹介する。

I 岐阜県内の発生実態調査と防除の現状

飛騨、中濃、東濃地域の夏秋トマト栽培はおおむね5月上旬～6月上旬にかけて定植し、7月中旬から11月下旬まで収穫する栽培体系となっている。褐色輪紋病は発生が早い年で6月中下旬から認められ、8月下旬以降の長雨により発生が助長される傾向にある。多発時には8月中旬に葉が枯れ上がり、9月以降の収穫が皆無になることもある。ここ数年で本病の早期多発被害報告が増えてきたことから、本病の発生状況およびその防除対策の実施状況を把握するため、2020年に各地域の生産者282名に対して、普及指導員がアンケート調査を実施した。

その結果、夏秋トマト栽培の産地では全域で発生が見られ、これまで少なかった飛騨地域でも発生が増えており、地域ごとでその発生量や程度に違いがあった（図-5）。特に標高のやや低い地域（500 m以下）や担い手の高齢化が進んでいる地域での発生が多い傾向となった。本菌の最適生育適温は25℃であり（伊達ら，2004）、標